デイヴィッド・E・クーパー

大出晁 服部裕幸 共訳

紀伊國屋書店

著　者

David E. Cooper

現在，ロンドン大学
教育研究所講師

訳　者

大出　晃（おおいで　あきら）

1926年東京に生まる．1952年慶応義塾大学文学部哲学科卒，慶応義塾大学助手，助教授を経て，現在，慶応義塾大学文学部教授．

主要著訳書：『日本語と論理』（講談社），「論理と数学」，「思考と言語」（岩波講座，哲学），クワイン『集合論とその論理』（岩波），デカルト『精神指導の規則』（白水社），『精神と世界に関する方法』（紀伊國屋書店，監修）その他．

現住所，東京都世田谷区深沢6-31-4

服部裕幸（はつとり　ひろ　ゆき）

1949年東京に生まる．1971年慶応義塾大学経済学部卒．現在，慶応義塾大学大学院文学研究科博士課程在学中．

ことばの探究

1976年7月20日　第1刷発行　©

発行所　株式会社　紀伊國屋書店
東京都新宿区新宿3の17の7
電話（354）（代表）0131
振替口座東京125575

出版部　東京都千代田区五番町12番地
電話（263）4914-5（編集）
（263）9006（営業）
郵便番号　102

印刷　三和印刷
製本　三水舎
Printed in Japan

定価は外装に表示してあります
落丁・乱丁の際はおとりかえいたします

ことばの探究

デイヴィッド・E. クーパー
大出晁 服部裕幸 共訳

ことばの探究
その哲学的分析

紀伊國屋書店

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

David E. Cooper

PHILOSOPHY AND THE NATURE OF LANGUAGE

Copyright © 1973 by Longman Group Ltd.
This book is published in Japan by arrangement with Longman Group Ltd. through Japan UNI Agency. Inc., Tokyo.

序

本書の内容について論評して下さったギルバート・ライル、ハワード・ポスペセルの両教授およびデアダー・ウィルソン嬢に謝意を表しておきたい。また、多数の学生諸君にも感謝したい。私が彼らに述べたことを言いえないことだと言い、また言いうることだと言うのを拒んだ彼らのおかげで、本書が現に含んでいる以上には、哲学者たちにありがちな言語に関する多くの誤った直観に本書はまみれずにすんだのである。

ロンドン大学教育研究所

一九七三年三月

D・E・C

目次

序……五
第一章　序　論……九
第二章　意　味……二五
1　予備的考察……二五
2　意味の心的理論……四四
3　意味の行動理論……六一
4　意味の使用理論……七六
第三章　哲学での意味……八九
1　検証主義……八九
2　情緒主義……一〇五
3　典型と対極性……一二〇
第四章　指示と述語作用……一三五
1　指示は行われるか……一三七
2　指示の本性……一五四
3　固有名……一六六
4　述語作用……一七六

第五章　言語と文化……一八七
1　サピーア／ウォーフの仮説……一八八
2　二つのテスト・ケース……二〇〇
3　言語と概念化……二一四
第六章　文法と心……二三二
1　変形文法……二三四
2　言語と生得的知識……二六〇
3　いくつかの難点……二八四
第七章　真理、ア・プリオリ、同義性……二九七
1　ア・プリオリと分析性……二九八
2　同義性……三〇七
3　文と命題……三二二
4　「……は真である」……三三四
第八章　言語行為……三四七
1　語でいかに事をなすか……三五〇
2　哲学への応用……三六三
3　意味と言語行為……三七八

註……四一〇
参考文献……四一〇
訳者あとがき……四一一

謝　辞

下記の各社から版権を所有している題材について転載を許可して頂いた。

J. L. Austin, *Philosophical Papers*, 2nd. ed., 1970の中の 'Other Minds' からの引用 pp. 87, 98 &99—100 については' The Clarendon Press, Oxford; B. L. Whorf, *Language, Thought and Reality* からの引用については' The M. I. T. Press; William Alston, *Philosophy of Language*, ©1964, reprinted by permission of Prentice-Hall, Inc, Englewood Cliffs, New Jersey からの引用については' Prentice-Hall.

第一章　序論

言語に関する問題に興味を覚えるには、言語を月並みなものと考えることをやめなければならない。実際、われわれはみな言語をかなり流暢に使っている。われわれは言語とともに成長するが、それは歩いたり走ったりする能力とともに成長するのと同様である。それを使うために思案したりする必要はない。言語は、いわば、あまりにも容易なため深い説明――とにかく、歩いたり走ったりすることの説明以上の説明――を要求することはできないように見える。言語がほんとうにどれほど注目すべきものであるかを理解するためには、ヴォルフガンク・ケーラー（Wolfgang Köhler）の言葉を借りれば、その主題からの「心理的距離」をおかなければならない。宇宙飛行士が火星人の社会を発見し、火星人たちが、一見したところ、声も出さずまばたきもせずどんな物理的な手段も使わずに意思を伝えることができたとすれば、これはたいそう奇妙なことであり、説明を必要とするであろう。喉からある音を出したり、あるいは紙にちょっと走り書きをしたりして意志を伝えるというわれわれの能力も、押したり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

引いたり、棒で打ったり、接吻したりすることによってしか意思を伝えることができないようなあまり高等でない動物にとっては、同様に驚くべきことに見えるにちがいない。

「言語は、われわれの持っているもののうちでもっとも複雑、かつ洗練されたものと思われる」。たとえば、つい最近になってはじめて、文法学者は、われわれの言語の基礎にあるひじょうに複雑な文法規則を明らかにしはじめたばかりである。コンピューターはすばらしい数学者たりうるし、また、驚嘆すべきチェス・プレーヤーたりうる。しかし、現存するいかなるコンピューターも、人間の言語的能力を再現するところまではいっていない。コンピューターはせいぜい二流の言語使用者にとどまるのである。動物は、もっともこじつけに類する言い廻しを別にすれば、言語を使ってはいない。われわれは、ソール・ベロー（Saul Bellow）の英雄ヘルツォークの助言をいれて、人間の本性の定義など見合わせるべきかもしれないが、この助言を無視するとすれば、『話すものとしての人間』（*homo loquens*）というのが、どんな人間の定義にもまして適当であろう。疑いもなく、人間は、笑い、二本の足を持ち、羽を持たない唯一の生き物である――しかし、それはそんなに興味のあることではない。なるほど、人間は道具を使う唯一の生き物（*homo faber*）であり、また、政治的な組織をもつ唯一の生き物（*zoon politikon*）であろう――そして、この方がより興味がもてる。それでも、多くの人々にとって、道具の使用や政治的組織はきわめて原始的なものである。これに反して、知られているいかなる社会も手のこんだ言語を持っている。そのうえ、動物の世界で道具や政治に類似のものを見出すことは、言語の場合よりは、たぶん容易であろう。もちろん、多くの動物にとって、自分たちの敵や味方をある仕方で反応させるような音を出すことは可能であるが、この音は人間の言語とは種類をまったく異にしているので、そのよう

な音を言語の一部であると言うのは、せいぜい、誤解を招きやすいアナロジーであろう。第一に、動物は、もっともプリミティヴなレベルを越えては、自らの音声を音声列へと組織化することができない。ところが、人間の話し手のもっとも目につく特徴は、限られた音声のストックから無数の音声列を作る能力である。ハーバート・リード（Herbert Read）がかつて述べたように、「人間と動物の間のいかなる相違も、構文ほどには重要ではない」。第二に、動物は、猫が近づくと鳥がガーガー啼く場合のように、自らの環境における刺激に直接に反応して音を出す。そのような音は、人間の痛みや警告の叫びに似たものではあっても、われわれの作る文には似ても似つかぬものである。私のどんな環境も、私を「刺激して」私が今ちょうど書き下した文を書かせたりはしない。われわれが言語を発するということは、動物の音が刺激－コントロールに依存しているようには、それに依存してはいない。[1] このことに照らしてみれば、ルネ・デカルト（René Descartes）の後継者達を理解することはより容易であろう。彼らは、動物がなんらかの心的な活動を行なうことができるなどと考えるのは不可能だということを見出したのである。彼らのある者は、「もしも動物が論理的に思考するとすれば、動物は限りなく多種多様な真なる話をすることができるであろう。」と言っている。われわれは、そこまで深入りしようとは思わないが、少なくとも次のことは認めなければならない。すなわち、言葉は、人間を人間以外の自然から区別する、唯一とは言えないまでも、人間の一つのきわだった特徴なのである。

言語は、われわれのもっともややこしい所有物、もっとも重要でユニークな所有物であるばかりでなく、まことに注目に価することには、ほとんど普遍的ともいえる人間の所有物でもある。すでに述べたように、われわれに知られている人間社会は、そのそれぞれが他のなにかを欠いていることはあっても、

すべてある言語は持っている。そればかりでなく、数学の天才やチェスの天才がいる一方で、言語ということになると、多くの人々が、平等とは言えないまでも、少なくとも似たり寄ったりなのである。もちろん、ある人々——詩人、演説家、声色使い、数ケ国語に通じた人など——は言語の分野において特に熟達している。しかし、われわれのほとんどすべてが、無限に多くの文を作り出し、そして、理解することができるのである。もしもわれわれの多くが、代数で骨身を削るのと同様に、言語に関して骨身を削ったとすれば、実際、世界は悲しい有様になったであろう。たしかに、学校で新しい言語を学ぼうとするときには、われわれは代数の場合と同じくらい多くの困難に出会うが、子供のときにわれわれが母国語を吸収するときには、若干の例外はあるにせよ、それは、ある人のほうが他の人よりもまったく容易だと思う、といったたぐいのことではない。言語的な能力の差異は類似点と比べると影が薄くなる。

言語は、その複雑さにおいて、人間という種に特有であり、かつ遍在しているという点で、注目すべきであるばかりか、その融通無碍な点でも注目すべきものである。適当な状況下で、適切な音声を発することによって、一人の人間が一日のうちに次のようなことのそれぞれを容易に行なうことができる。他人に、何が起りつつあるかを知らせる、なにかをするように求める、命令する、他人を興奮させる、約束する、侮辱する、ひとりごとを言う、うっぷんを晴らす、結婚するなど。これらの例のうちのいくつかが示すように、われわれは、一般には、他の行為と切り離された行為として音声を発することはない。むしろ、話すということは、普通は、ある、より広い行為の一部なのである。われわれは、編み物をするように、つまり、他から孤立した、多少なりとも自足的な行為として、話をするわけではない。

むしろ、言葉なしでは行なうことが困難であったり、不便であったり、あるいは不可能でさえあるような行為を、言葉を用いて行なうのである。そのような可能な行為は数かぎりなくある。

私は、その必要がないかもしれないが、言語が一つの驚くべき組織体であるということを示すために、これらの点を指摘してきた。言語は、人間生活の他のいかなる側面とも同様に、いや、おそらくはそれ以上に、説明を要するものなのである。

本書は、密接に関連はしているが区別されるべき二つの異なる分野を扱っている。一方に言語の哲学があり、他方に分析哲学がある。言語の哲学は哲学の一分科であり、そこでは、哲学者は、ある決定的に重要な言語学的概念、たとえば、意味とか指示とか真理といったものを分析し、説明し、探求しようとする。それは、科学の哲学、すなわち、科学者によって使用されている概念を分析しようという試みの一部と見ることができるかもしれない。科学哲学者が、物理学者や生物学者の使う電子とか遺伝子というような概念を分析することに関心を持つのと同じように、言語の哲学者は、専門的な言語学者が使っている概念を分析することに関心を持っている。

実際には、科学者の関心と科学哲学者のそれを区別することは容易ではない。どちらも、それぞれの方法で、遺伝子、電子、原因、動機、法則、意味、あるいは実体などを研究する。少なくとも次のように言うことはできるであろう。いかなる科学者も、彼の思考や彼の仮説の定式化において大きな役割を果すある決定的に重要な用語を使用している。彼は、しばしば、これらの用語の明瞭で正確な説明を与えることができない。普通は、そして幸運にも、このことは彼の科学的業績を妨げるものではない。化学者は「原因」を正確には定義できないかもしれないし、またそうすることに興味を持たないかもしれ

ないが、そのことは、彼がわれわれに実験室で何が何をひきおこすかを言うことを妨げはしない。心理学者は何が行動に駆りたてるかということの明確な説明を与えるのに窮するかもしれないが、このことは、動物の行動に対する空腹や喉のかわきの影響についての興味深い事柄を彼がわれわれに教えることを妨げはしない。しかし、科学哲学者を特徴づけるものは、科学者が使っている方法論を調べるということと並んで、まさに、科学者によって使われているこれらの概念を明確にしようという試みなのである。幾分かは、彼は、こうしたことを行なうこと自体に関心を持っているであろう。実際、電子だとか因果性という概念の中に含まれているものを正確に知るということは、知的な満足を与えるであろう。しかし、もっと実際的な関心もあるかもしれない。概念を正確には定義することができないということは普通は科学的研究を妨げるものではないと述べたが、時には妨げることもある。たとえば、さまざまな実験の価値に関して、動機づけ（motivation）を研究している心理学者の間で多くの不一致があるが、それは、動機とは何かということについての異なった考え方によっている。[2] 確かに、われわれが何を測定していると思っているのか分らなければ、動機づけを測定する内容のあるテストを考案することは困難であろう。

概念を明らかにしようという要求は、科学の幼児期、つまり、概念が、いわば、まだ明確な安定した意味を持つに至るまでには成熟していない時期には、とくに強い。この理由からして、自然科学者は、社会科学者ほどには、意味論的、概念的な葛藤に巻き込まれることがないのである。言語学は現在幼児期にある。もちろん、何世紀もの間、ヤコブ・グリム（Jacob Grimm）のような人々が、語源や、言語の比較、分類において、学問的な仕事をしてきた。しかし、言語の構造を調べようという組織的な試

みは最近の試みなのである。時には、それは、今世紀のはじめ、フランスの先駆者フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure）の仕事から始まったにすぎないとも言われる。とにかく、言語学者が、社会学者同様、明確で適切な理論的説明を与えることが難しいと思われる概念を使わなければならない、という悩みを有することは、とりわけ、明らかである。後に見るように、意味、指示、真理、言語行為、主語、述語というような概念、さらには、概念それ自身でさえ、明確にする必要が大いにある。しかし、このこともまた、言語学者は、言語哲学者あるいは概念的な問題により気を使っている同僚の助けがなければ、仕事をすることができないということを意味するものではない。言語学者は、依然として、フランス語と英語の単語の意味を比較することができる。あるいは、文法の規則や音声学の法則がどんなものであるかを解明することができる。しかし、そのような援助があれば、彼はもっと秀れた仕事をすることも可能だということはありうる。とにかく、それによって、彼は、自分の仮説をもっと明瞭に定式化することができるようになるであろうし、一方での概念的な問題と、他方での実質的・経験的な問題とを区別することができ、その科学の基礎に論理的な明晰さを与えることができるということに満足し、快い気分に浸ることはできよう。

言語哲学者の関心を言語学者のそれから区別すべき点がもう一つある。多くの哲学者が、今日、言語それ自身のために研究しているが、この関心は、もともとは、別の考察の動機として生じたものである。基本的には、哲学者は、哲学のために言語から得ることができるものがあるので、言語に関心を持つようになった。したがって、言語哲学者は、その答が、倫理学や認識論、形而上学などの伝統的な問題に自分をはじめとして哲学者たちが取り組む時に、助けになりそうな問題を問う傾向がある。たとえば、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo